

「NPO法人木材・合板博物館が合板業界の強い希望とリーダーシップのもとで創設された時から、私の希望はこの博物館を森林と木材に関する情報発信の基地にすることでした」と語るのは、平成一九年一〇月のオープニングから木材・合板博物館の館長を勤めている岡野健氏です。

岡野館長は「開館以来、訪れる人全てに、『木を伐ることは悪いことではない。森林は人によって利用されて初めて健全な成長が図られる。また、本当の木の強さは力学的な強度ではなく、日本の風土の中でどれだけ長く使い続けられるかであり、スギやヒノキなどの製品にはそうした耐久性や使いやすさがある。家を建てるためには柱や土台、梁といった骨組となる部材は必要不可欠だがそれだけでは建たず、壁を構成する面材があつて初めて完成する。こうした建築物の面を構成し、かつ耐震性を高める製品として構造用合板の利用が近年広がっており、ここではスギなどの国産材も多く使用されている』ということを子供にも大人にも、木材を知らない人にも木材業界の人にも同じように内容を発信してきました」とふりかえています。

木材・合板博物館がある東京都江東区には、現在四三の小学校がありますが、岡野館長は江東区に働きかけ、社会科見学のコースに合板博物館を組み入れてもらいました。昨年は一〇校が見学に訪れ、本年は一八校の見学が予定されています。ここでも岡野館長は、小学生に対して森林の大切

緑のエッセー

木材・合板博物館館長 岡野 健

岡野 健（おかの たけし）
1938年千葉県生まれ。1965年東京大学大学院農学系研究科修了。東京大学名誉教授。農学博士。
2003年に東大教授を退職後、木の何でも相談室の第二代室長に就任。2007年10月の合板博物館の創設に際して初代館長に就任。NPO法人木材・合板博物館の理事を務める。



さや森林をきちんと整備することの必要性、間伐をした場合としない場合での違いなどについて、館内の展示物を使って優しく説明しています。

そうした中で痛切に感じることは「学校教育の中で木という素材を学べるのは、中学校の技術家庭科の中で木材加工のみで、それ以降は高校、大学を通じて全くない。木に触れ、木から学ぶ機会が非常に少ない」ことだと強調します。「木材加工を体験するということは、自然物が持っている様々な特性を知る契機となります。1か0の組み合わせでしかないITの世界とは異なり、自然物に触れることを通じて豊かな感性が養われ、モノづくりという創造の世界へと繋がって行きます。だから高校や大学でもそういう機会を取り入れて欲しい。これからはそういう働きかけを積極的に行っていきたい」と、今後の目標を語ります。そして、「人間が全く手をつけていない自然のままの極相林の物質生産がゼロなのに対し、人工林では鈔当たり一〇から二〇トンの物質生産が毎年行われます。極相林では、森林が生産する物質量が消費する物質量に相殺されてしまうため、健全な森林とはいえません。森林の生産物を利用することで森林の成長が維持されるということ、そして木を利用することが森林の保全に役立つということ、これからの機会あるごとにPRしていきたい」と思います。木を伐ることは悪いことではない、というコンセンサスが広く国民の中に定着するよう一生懸命働きかけていきたい」と決意を語っています。